## 論文要旨

本論文では、文化交流の本質的要素である人間の「認識」という行為についての分野 横断的な考察を柱に、この半世紀間の日韓関係に大きな革進をもたらすコペルニクス的 転換の方法論と方向性を述べる。

両国の未来へ向けた新たな関係性のあり方を考える上では、従来の交流の意義と価値 も踏まえた上で、いまだ充分な相互理解と信頼醸成に基づく関係性が確立できない根本 原因が一体何なのかという命題に対しての精緻な「診断」と、その根本原因を解消して 新しいステージへの飛躍を遂げるための斬新な「処方」が緊要であろう。

近年において両国の文化交流が大きく進展し、旅行・観光・経済産業面での人的交流や 共同の歴史研究なども試みられる中、両国関係が未だ越えることができない歴史や領土 問題等の障壁を乗り越えて前進するためには、従来の延長上にはないメタレベルの問題 意識(診断)と解消法(処方)の検証と導入が不可欠だと考える。

そこで、単に国家民族中心の認識・判断・意思決定方式にとどまらず、人間共通である 脳の認識機能とその限界に着眼し、さらにその限界を補完・進歩させることができるメ タ認識を土台とした教育文化交流の必要性と有効性を提案したい。

人間の認識能力のメタ化を可能にする教育として開発された「認識技術」の活用を中 核に置くことで、両国の交流と未来創造の細かさ、広さ、深さ、高さを大きく転換させ ることが可能であり、そこから出発する新たな両国関係のグランド・ビジョンを提示す ることが、本論文の主眼である。

論理展開の段階としては、両国の「共通の認識基盤の形成」「共通の課題の確認」「共 通のアジェンダ・セッティング」「共通のビジョンの策定と実践」という四章構成により、 順次新しい日韓関係への道筋を論究していきたい。

また両国の未来への方向性を考える上では、単に日韓二カ国の未来ビジョンという視 野に留まらず、歴史的な視座、そして現下の世界の動向や文明史的な時代の趨勢も踏ま えながら、日韓から全世界へと発信する教育、経済、政治の大きなロードマップを提案 してみたい。

なぜなら現代は、イタリアから始まった西洋のルネサンスに端を発する「西洋近代文 明」の様々な矛盾と限界が各分野において再検証の対象とされ、21 世紀以降の世界秩 序の再構築について、斬新で画期的な創造性が求められているからである。

ルネサンスは、古典文化の再生(Re·naissance)に始まり、新たな人間の認識・判断・ 意思決定方式を拡張する理性を開花させ、現代にまでつながる他分野の学術教育及び科 学と、経済思想や経済システム、政治思想や政治システム等を具現化させた。

そして日韓両国も、19世紀半ば以降、「西洋近代文明」のパラダイムに即した発展と

繁栄を追求して現在に至ったという点では、同様の構造下に置かれていると云えよう。 であれば、日韓両国の共有背景となっている「西洋近代文明」の問題点を検討し、超 克し、新たな文明のパラダイムを提示する壮大な役割を日韓が協同で担うことは、日韓 両国、そしてアジアと世界全体にとっても大きな意義を持つものと考える。

西洋のルネサンスが人間の世界認識の変化から出発し、世界全体に新たな普遍的価値 を展開して行ったように、日韓から始まるネクスト・ルネサンスも、メタレベルの人間 の世界認識の変化から出発し、世界全体に真実の普遍的価値を展開しうる可能性は充分 にある。

そのために日韓が担うべきグローバルスタンダードの「基軸教育」の必要性、新たな 経済開発ビジョンとしての「Edunomics」、そして新たな社会、政治の理念として「関係 主義」、「尊厳民主主義」を提唱する。

それらが単なる理想論ではなく、既に実践と成功の種は生まれており、最も有効で、 最も価値ある現実的な変革のビジョンであると共に、その新たな選択への意思決定が両 国の最高の未来価値創造につながるものであることを提示する。

# 目 次

■1.序論	5
■2.文化交流における「共通の認識基盤の形成」	
§2-1.文化交流の定義と構造的問題点	7
§2-2.文化交流の本質的問題の診断 水崎林太郎と李相和を題材に	8
§2-3.認識の本質についての分野横断的考察	10
§2-4.「認識の共通基盤の形成」4 段階	13
■3.世界史的視座から観た「共通の課題の確認」	15
§3-1.近代世界史における日韓両国の歴史的背景	15
§3-2.日韓協同で具現化させるべきメタ認識による相互交流	17
■4.課題解決に向けた「共通のアジェンダ・セッティング」	20
§4-1.21 世紀の時代的重要課題「人間の再定義」	20
§4-2.「正-反-合」を完成させる関係主義パラダイム	22
<b>§4-3.</b> ソフトウェア競争時代の言語の最終主導権	24
■5.未来に向けた「共通のビジョンの策定と実践」	27
§5-1.メタ認識開発時代の最先端を主導する「基軸教育」	27
§5-2.資本主義経済と先進国の罠を突破する「Edunomics」	28
§5-3.日韓発の新たな普遍理念「尊厳民主主義」	30
■6.結論	32

# ■1.序論

本論文では、国交回復から半世紀を経た日韓関係が、次の半世紀において取り組むべ き両国関係の要諦について、四つの共通事項を持つことを提案し、論究する。すなわち、

「共通の認識基盤の形成」、「共通の課題の確認」「共通のアジェンダ・セッティング」「共 通のビジョンの策定と実践」の四つである。そして、これら全てを貫く両国の未来への 最重要の柱はメタ認識方式による教育文化交流にあり、そこを基準点とした新価値創造 であると考える。

国交回復後半世紀に渡る日韓関係は多くの面において交流の度合いを深め続けるこ とに成功してきたが、にもかかわらず、両国の間には歴史、領土問題、国民感情におい て越えきれない確執が厳然として存在し続けている。

この間、日韓両国の有意の人々は、この深い溝を越えて未来に向かうための議論や研 究、交流、交渉を重ねてきたものの、未だにその成果は十分な結実を観ているとは言い 難く、また従来の文化交流の次元の延長上では、次の 50 年への全く新しい展望と希望 を開きうるだけの根拠と原動力は期待し難いのが偽らざる実情であろう。

そこで本論文では、従来の概念や接近方法とは全く異なるアプローチと状況分析、そ して未来像の提案によって、新たな日韓関係構築の方途と方向性を提示したい。

両国が抱える複雑な現況の諸課題を解消し、両国関係が新たな領域への進歩を遂げる 為には、まずもって文化交流の本質に関する認識と理解を従来よりも深化させ、そこか ら両国の発展的関係性の障害となる要因についての「診断と処方」を再検討する必要性 があると考える。

著者の二名は現在、日韓 VISION 同盟という民間の任意団体の両国代表として、2011 年の発足以後、日韓関係の改善に向けたフォーラムや研修、民間交流などの様々な取り 組みを実践し続けている。

その活動の中核には、従来の人間教育による認識領域をより深く広くメタ化し、先入 観や偏見を「ゼロ化(無化)」した新たな認識領域を土台に創造性や社会性を育む、独 創的な「認識技術」による教育体系がある。

「認識技術」は盧在洙が 1996 年に発見した認識の究極的本源である無意識の構造と 作動原理をもとに、論理とイメージによる人間開発の教育技術として日本人と協力して 20年に渡り体系化したものである。

その過程において、「認識技術」をコア・コンテンツとしたグローバル人文ベンチャー 企業を創設し、日本、韓国で人間開発教育事業を成功させ、現在はアメリカはじめ英語 圏にも展開準備をしている段階にある。

この「認識技術」の教育内容を共有している日韓両国の有志によって実施、構想され

ている新たな日韓交流は、確実にこれまでの両国関係の障壁と限界を打開し、新たな可 能性を開きつつある。

それらの取り組みの独自性と有効性も参考題材にしつつ、これまでの日韓関係の関係 性構築における本質的問題点、及び新たな関係性とビジョン構築が奏功している根本的 理由についても、検証を試みる。

本論文ではまた、これまでの両国の相互交流の問題点を補完・進歩させるキーターム である「認識」についての分野横断的な考察も踏まえ、独自に開発した認識論の要点と 価値にも言及する。

文化交流や未来構想というものが、つまるところ例外なく人間の認識活動の産物であ り結果態によるものである以上、近年の人文科学、社会科学、自然科学の学際的な研究 領域をメタレベルで融合させる新たな認識論の活用は、日韓交流における「共通の認識 基盤の形成」において非常に重要な意味を持つものであろう。

脳神経科学や人工知能の研究に観られるように、人間の認識領域における科学的探究 が飛躍的な進化をとげている現代にあって、人間のすべての判断、思考、感情の根源を 司る脳機能の認識活動に対しての最新の見地を取り入れることなしには、従来通りの局 所細部の議論の応酬にとどまってしまうことが懸念され、「認識」によって生じる関係 性の諸問題に斬新な解消法を取り入れる余地が損なわれよう。

これは、ともすれば日韓関係を論じる上で常に陥りがちな、「いずれの主張や論証が より正しいか」という認識次元での議論と交流ではなく、より俯瞰的かつ包括的なメタ 認識を基準とした相互交流と提言をする上でも非常に重要な要因であると考える。

特に日韓両国の間に横たわる歴史認識問題や領土問題などについて、これまでの延長 上での事実検証や論理的正当性を主張しあう議論ではもはや現況の閉塞状況の打開が 期待し難い現状にあって、文化論や法律論、歴史学的なアプローチだけではなく、外か ら新たな研究領域の観点を取り入れることは、論究のすそ野を広げる上でも大きな意義 を持つものであろう。

このような視点からの考察により、従来の日韓間の文化交流や実証主義的歴史研究の 議論のいわば盲点が、「認識」の問題に関する本質的洞察の不足と不備であったことを 明らかにし、またそれを補うことを契機として、両国が共に手を取り合える新たな未来 ビジョンの構築を提案することが、本論文の目的である。

また日韓の未来を考える上では、広く世界史の大勢と現在の国際情勢の動向も鑑み、 文明論的な位置づけの中で、「西洋近代文明」の超克という両国の根源的課題と、新た に向かうべき未来ビジョンの方向性を考察する。そうすることで、日韓二カ国のみに限 定した枠内での思考回路では開けてこない、両国関係の新たな視界の提示を試みるもの である。

# ■2.文化交流における「共通の認識基盤の形成」

#### § 2-1.文化交流の定義と構造的問題点

文化という単語は、多義的な意味合いを持ち、各学問分野においても異なる定義付け がなされているため、ここでは次のように定義しておく。すなわち文化とは、異なる時 空間の条件と影響によって形成されたある人間集団内で、意識的無意識的に共有される 認識の枠組みのパターンの総体である。

ここでいう認識の枠組みの中には、現象世界全体に対しての認識、判断、思考、感情、 言語、表現体系、行動様式、関係性といった複合要素が含まれる。日韓関係においては、 島国である日本と半島国家である韓国の地理的、歴史的要因から派生する多様な条件と 影響の違いを土台として、古代から多くの文化交流がなされてきた。

近年の韓国における日本の漫画やアニメやドラマの受容、また日本における韓流文化 の受容は、両国の相互理解と友好に相応の効用性をもたらしたと考えられる。しかしな がらその後、安倍・朴両政権間においては首脳会談の開催も実現しないほど外交関係は 硬直化し、文化的ソフトパワーによる日韓交流の一時の高まりも、減退傾向に入ったと 云えよう。

ここから、文化交流の本質的問題及び意義を考える上で、二つの重要な論点を汲み取 ることができる。

ひとつは、表面的に良好な関係性を醸成する従来の文化交流だけでは、ある程度まで の相互協調は生まれても、結局のところ日韓両国の歴史的、政治的、感情的確執を越え うるだけの強い力にはなり難いという点である。

そしてもうひとつは、関係性が「水平的」な理解や信頼醸成の相互交流に留まり、日 韓協同による「垂直的」なビジョンや方向性の目的共有と実行意思という条件が伴わな い限りは、両国関係の未来を力強く牽引する原動力は生み出し難いという点である。

この現状を打破できないという事実は、過去50年間の日韓交流の本質的限界と再考 の必要性を示すものであり、であるからこそ、今切実に求められていることは、従来の 交流の問題点についての「診断と処方」を通した、問題意識のメタ化である。

両国関係を進展させるためには何が障害となり、何が必要なのかという正確な診断と これまでとは全く異なるメタレベルの概念やアプローチからの処方が必要なのである。 二つ目の「垂直的」ビジョンの共有という論点についての具体的論究は第3章以降に 譲り、ここではまず一つ目の論点の要点整理をしつつ、理想的な文化交流の本質におけ る必要条件を考える。

まず日韓の文化交流の本質を理解する構造の整理のために、1 対 1 の人間関係におけ る「情報の発信と受信の相互作用」という形式を想定してみよう。

ここで前述の文化の定義を敷衍すると、「情報の発信と受信の相互作用」の根底にあ るのは、各人の認識の枠組み、つまりは認識空間の相互作用であるという構造が提示で きる。

例えばここに A (日本) と B (韓国) という二人の人物をおく。A は、A の認識空間 を構成するさまざまな要因を土台に、Aの認識空間を発信し、Bはその認識空間を受信 する。同様に、Bの認識空間を発信し、Aがその認識空間を受信するという相互作用の 反復が、文化交流の形式的かつ本質的行為であると規定できる。

この構造で観たときに、実は日常的な交流においてほとんど問題にされることのない 大前提の盲点が二つある。

ひとつは、近年の脳神経科学が明らかにしているように、この各人の認識空間は、人 間の脳機能の個々の認識作用の結果態であり、同時に非常に不完全なものである、とい う点である。

そしてもうひとつは、実は交流の出発点からして、二つの異なる認識空間が存在して いるため、厳密な意味での「認識の共通基盤」は構築されておらず、また、相互の認識 空間が正確に疎通し得ないという点である。

そこで次節ではまず、なぜ従来の文化交流が十分な和解と融和をもたらさなかったの かという認識の齟齬の原因について、日韓関係の現実の事例に即して診断してみよう。

#### § 2-2.文化交流の本質的問題の診断 水崎林太郎と李相和を題材に

2015 年 4 月、韓国·大邱にて、日韓が共に享受する未来に向けて、日韓 VISION 同 盟が後援し、韓国代表の盧在洙が組織委員長をつとめた日韓交流フェスティバル 「NURITSYO(韓国語:ヌリラ+日本語:一緒、の意を合わせた造語)」を開催した。 開催地大邱には、寿城池という人口の貯水池がある。この地は、日本が韓国を統治して いた時代、日本の岐阜県から開拓農民として大邱に渡った水崎林太郎が、農業用水の枯 渇を解決する目的で水利組合を設立し、10年間の築造期間をかけて完工したとされて いる。

現在では民間団体の韓日親善交流会が水崎林太郎の墓を維持し、追悼式が毎年行われ、 2015年には駐韓日本大使も列席している。寿城池6万坪の開拓により周囲250万坪の 田畑が潤され、水崎は遺言により、寿城池が見渡せる場所に韓国式での埋葬を願ったと 言われている。寿城池の開拓は、水崎が朝鮮総督府から引き出した巨額の資金援助に加 え、水崎本人の私財投入により、1917年に始まり1927年4月に完成した。

しかし同時にこの地は、韓国で最も有名な詩人の一人である李相和が、1926年6月 に発表した詩、「奪われた野にも春は来るか」によって、日本の植民地統治への反意と 憂いを表現したのと同一の場所でもある。

1926年とは、1919年の3·1独立運動以降の日本の朝鮮統治方針が転換した後で、いわゆる武断統治から文化統治への軟化が既に広まっていた時期に当たる。この時期に、同じ寿城池という「存在」に対しての李相和と水崎林太郎の「認識」の相違は、これからの日韓文化交流のメタ認識への本質的転換を考える上で、最も重要な論点を示唆している。

ここで二人の認識空間について考えてみよう。李の認識空間では、寿城池周辺は日帝 強占によって「奪われた野」として「認識」され、彼の眼前にはそのような場所が「存 在」し、そのように詩に表現している。

また一方で水崎の認識空間では寿城池は、朝鮮の民と共に、朝鮮の民のために、より 良い暮らしのために私財と人生を投じて開拓した、いわば日韓協同による希望の地とし て「認識」され、そのような場所が「存在」していたと推測できる。

さてここには、1910 年から 1945 年までの日本の朝鮮統治に対する日韓両国の歴史 認識の相違と全く同じ構造を観て取ることができよう。

端的に云って、李にとって、あるいは韓国にとって寿城池は「奪われた野」として認識され、一方で水崎にとって、あるいは日本にとって寿城池は「希望の開拓の地」として認識されているならば、真実に存在する寿城池は、果たして「奪われた野」なのか、「希望の開拓の地」なのか、どちらの認識が正しいと云うべきなのであろうか。

ここでは、単に双方の価値判断の相違、といった表面的な理解にとどめてはならない、 日韓両国の関係性にとって非常に根源的な人間の認識論上の問題が、最も象徴的な形で 表出しているのである。

通常、そして従来の日韓の歴史や文化交流においては、こうした認識の差異が生じた場合、基本的には自分たちの側の認識の正当性を補強するための証拠や論理、あるいは感情を主張することが常であった。

例えば韓国側は、日帝強占期に世界最悪の植民地支配と収奪を受けた、という基本認識に立ち、そこを基準点として、いかに日本の統治が過酷だったのかという立論に向けた実証性を正当のものとする。

対して日本側は、欧米の植民地帝国主義の歴史との比較対象や、併合の国際法上の正 当性、また朝鮮統治における近代化の意義などを基本認識とし、その立論に向けた実証 性を正当のものとする。

ここで本質的に問題とするべき事は、実は歴史学的実証性や法理的正当性ではない。 思考・判断の根幹にあって、無自覚のうちに強固に固定されている、人間の個々の認識 方式、観点の問題なのである。

水崎林太郎と李相和の例からも類推されるように、客観的絶対真実としての正しい認識と存在というものは、元来実在し得ない。日韓の認識の相違についても、あくまでも、

個々の認識空間の中で無意識的に自分が絶対正しい、という思い込みに観点が固定され たまま、その正当性を理解させようとするための論理構築の域を出るものではない。

にもかかわらず我々は、文化交流の本質であるこの「認識」の本質的問題において、 あまりにも不用意で不注意であったことを認めざるをえないであろう。

現代の脳神経科学が明らかにしているように、各人の認識空間というものは、個々の 脳の認識作用の結果態に過ぎない。例えば 10人いれば 10通り、100人いれば 10通 りの寿城池が認識され、存在するのである。寿城池周辺を「奪われた野」と認識する李 相和もいれば、「希望の開拓の地」と認識する水崎林太郎もいれば、歴史背景を知らな い旅行者には、「桜の綺麗な観光地」として認識する者もいるであろう。そして、各人 の認識空間においては、そのような寿城池が確かに存在するのである。

このように各人の認識空間というものがそもそも共通基盤を持ちえていないのだか ら、「違い」を認識の基準点とした交流が深い相互理解に到達しえないのは理の当然と 云えよう。

しかしそれだけでは我々は、単に世界認識の相対性、という結論にとどまるをえず、 いかにして融合、発展性のある文化交流を可能にするかという命題に対しての最適解を 失いかねない。

であるがゆえに、この個々の脳を基準とした認識の相違を越えた、メタレベルの認識 方式と「認識の共通基盤の形成」が必要とされてくるのである。

#### § 2-3.認識の本質についての分野横断的考察

改めて認識の本質を整理するに辺り、認識する、という概念の意味を、「自分と自分 の宇宙(現象世界全て)をどう思うのか、という判断・意思決定方式」というように定 義しておく。

現代の脳神経科学によれば、人間の基本的な認識活動は、目、耳、鼻、皮膚、口の五 感覚の入力経路からの情報データのインプットと、脳の各部位の電気作用による個別情 報処理、そして脳機能全体による統合的アウトプット作用、という一連の作業による。 そのようにして普段私たち人間が現実、現象と呼んでいる認識空間が総体的に生み出さ れている。すなわち古今東西の人間のすべての世界認識は、五感覚の脳機能を基準とし、 脳機能に依存した「身体的感覚世界」であると云える。

この地球上に人類種が誕生して以降、人間が他のいかなる生物種とも異なる進化発展 を遂げた最大の要因は、脳の容量や機能の圧倒的進化にある。しかし、実はこの人間の 脳機能の認識と感覚的特徴の問題点こそが、日韓関係の不和、そしてあらゆる人間関係 の不和の根本原因なのである。

ここで、脳の一連の認識活動と、その認識次元の問題点と分類について、盧の著作か らの立論を引用する。

脳の認識の仕組みを見てみると、人間の認識の80%をつかさどる視覚は、可視光 線だけを取得し、知覚しています。人間の目が取得した可視光線は、角膜と水晶体 を通って視神経に流れ、神経細胞を伝わって視床下部へと運ばれます。その視床下 部はインプットされた情報の解析を脳内の各セクションに依頼します。各セクショ ンは「輪郭」「奥行き」「色」「動き」などを、クラウドコンピューティングのよう に分散処理し、その結果を再び視床下部に戻し、集められた情報が瞬時に統合され て、目の前の映像、つまり現実画面として映し出されるのです。

このように、五感覚から入った情報データが脳を通過し、脳の認識作用によって映 し出された立体画面が、いま私たち人間が見ている宇宙(現実)なのです。ですか らこの宇宙(現実)は、人間の脳の認識の結果熊であり、脳が創造している錯覚の 芸術といえます。

たとえば同じ情報データが犬の脳を通過すれば、犬が認識する犬の宇宙がつくられ ますから、当然それは人間の見ている地球や太陽とは色も形も違う宇宙であり、人 間が認識している時空間とも異なります。ところが、私たち人間は、誰もが生まれ た瞬間から人間の認識している宇宙だけが絶対正しいと無意識に確信し、その認識 の土台で学問と教育が成り立っているのです。

また、人間が認識している世界をより詳細に分けてみると「真実、現実、事実、思 い込み」の四つに分けられますが、真実以外の現実・事実・思い込みの三つは、人間 の脳の五感覚がつくり出す錯覚なのです。

《人間が認識している4つの世界》

真実:永遠不変のひとつ(5次元ひとつの動き)だけがある世界。

現実: 五感覚の脳が、永遠不変のひとつの世界を 4 次元化(空間 3 次元+時間 1

次元)して映し出す認識画面。

事実:現実にさらに人間共通の思い込み(人間の意識作用)や解析が入った世界。 誰が見ても客観性、整合性がとれている。

思い込み:人間一人ひとりが主観的に現実を解析する世界。

(盧在洙著『観術で生かす日本の和心』 2013:93-95 頁)

ここで人間が認識している 4 つの世界分類があるように、従来の私たちの認識は、 「現実・事実・思い込み」という、錯覚の認識画面内の3つの段階に留まっている。さら に言えば、日韓の従来の文化交流は、この現実が人間の五感覚脳の認識の結果態である

という科学的事実とそれが意味する問題点などは省みること無く、「事実」と「思い込 み」の2つの世界認識だけで、自分たちの正しさを主義主張してきたに留まっている。

前節であげた水崎と李の例で云えば、水崎と李の脳機能が認識する個々の「現実」の 認識画面があり、その認識画面内での客観的「事実」として、寿城池が開発された、と いうように共有されている。しかし、その池を主観的にどのように認識するかは、各人 の「思い込み」に属するものと整理できる。

従来私たちはこういった認識行為の本質に注意を払うこと無く、知識、論理、経験を 増やし、それらを主義主張する交流を主としてきたが、新たな日韓関係においては、そ もそも世界認識の大前提の中心軸を移動させる必要があろう。

それは、「存在があるから認識する」という世界観が実は正しいものではなく、脳の 認識機能とプロセスの解明から明らかなように、この現象は人間の個々の脳が「認識す るから存在する」という科学的事実である。

この世界認識は、実はソクラテス以降の様々な哲学的命題にも通ずるもので、カント やニーチェ、フッサール等が論じた認識論とも共通要素を持つ。

また量子力学的世界観や相対性理論、現代物理学の最先端にある 5 次元宇宙論やひ も理論、M 理論の研究でも明らかにされているように、現象世界の存在(有) は絶対固 定のものではない。量子力学的世界においては、観測した瞬間に波束の収縮が起こり粒 子化現象が起こることは理論的、実験的に既に証明されている。 そして M 理論の 11 次 元の宇宙論においては、この宇宙は 10 の 500 乗個存在し、それは生滅を繰り返すとい う理論も導かれている。

これらのことは、通常我々人間が当然のように、「自分と自分の宇宙が有る」と認識 している世界観の大前提が、根本的な修正を求められていることを意味する。10 の 500 乗個の宇宙を理解するには、ひとつの物理的存在宇宙の裏に、その宇宙を各個が認識す る、いわば無限数の認識宇宙がコインの表裏のように一体化されている世界認識を取り 入れなければ、理論的整合性が導かれないのである。また 10 の 500 乗個の宇宙が生滅 現象を繰り返すということは、真実の世界認識のためには、宇宙が滅するところ、すな わち「自分と自分の宇宙が無い」世界も取り入れる必然性があることを意味する。

これはちょうど仏教において、「色即是空、空即是色」と語られた世界観と同様であ り、ここでは「色(有、物質、意識世界)と空(無、心、無意識世界)」は同じひとつの 永遠不変の実態で、不一不二のものである、というメタレベルの認識方式が示されてい

世界認識についてのこういった多様な理論や観点をひとつのメタイメージにより論 理とイメージで統合可能にしたのが、盧が発見した「真実」の世界である。このメタ認 識領域を客観的に理解可能とするメタ言語として「イメージ言語 | を開発し、認識再現 可能な「認識技術」として体系化した認識論の教育革命が成功したからこそ、日韓の新 たな交流のあり方の提案、処方を試みている。

従来の日韓交流と人間の交流は、存在を世界認識の前提基準とし、「現実」「事実」「思 い込み | の錯覚の意識レベルの中だけでとどまっていたと分類整理できるが、今からは、 無意識も取り入れ、「真実」の認識次元を基準点として、意識の無意識化、無意識の意 識化を自在に活用するメタ認識の教育文化交流へ移行可能な時代に入ったと云えるの である。

#### § 2-4.「認識の共通基盤の形成」4 段階

ここから、日韓の「認識」の問題点の重層構造を段階的に理解するために、4 段階の 認識領域に大別して、論究を進める。

各認識段階における無意識的な情報データや判断基準の総体が、ちょうど情報技術に おけるデータ共有のグループウェアの性質にも似ていることから、「認識技術」におい て人間の無意識の認識空間を「クラウド」と呼称しているので、本論文でもその表現用 途で以下使用する。4段階の認識領域とは、次のように区分できる。

1段階:「日本クラウド」、「韓国クラウド」のように、両国内での人間集団が認識画面の 中で共有している「事実」情報の総体として作用する認識領域である。先にあげた文化 の定義、「異なる時空間の条件と影響によって形成されたある人間集団内で意識的無意 識的に共有される、認識の枠組みのパターンの総体」も、ここでいうクラウドとほぼ同 義と解しておく。

日韓の文化交流とは、日韓それぞれの集団クラウドの相互作用、とも理解できるもの である。そして従来の日韓の交流は、お互いが異なる集団クラウドに基準点を置いたま ま、異質な集団クラウドとの交流と理解を試みていたがために、共通座標もなくベクト ルも異なり、本当の意思疎通が起こっていなかったと構造化できる。

日韓の次の半世紀の未来に向けては、この段階のクラウドでの交流に留まっていては 永遠に平行線にしかならないため、さらに高次の認識領域へと移行し、共通基盤の形成 を深める認識のイノベーションが求められる。

2段階:日韓をひとつのクラウドとして括り、それを「東洋クラウド」と規定し、この 対称構造として「西洋クラウド」を置く。「現実」の中で、日韓という枠よりも更に一 段階鳥瞰的な観点を持って日韓の認識と交流の問題を検証するための認識領域である。

これについての意義は第3章以降で詳述するが、このクラウドの対称性で日韓関係 を把握することの論旨は大きく二つある。

一つは、ともすれば日韓の文化交流、歴史認識においては、日本と朝鮮半島の19世 紀後半以降の関係性のみに視野狭窄を起こし、世界史、そして近代史全般の大勢に位置 づけた客観性の高い視座を持てず、むしろ狭い視界の外側に置いてしまいがちだからで ある。しかし歴史的に、西洋の植民地帝国主義といかに対峙するべきかという共通の難 題に直面したアジア、東洋の苦境があり、それを軽視しては、日韓の歴史的背景の深層 と未来構想の全体像が観えてこないと考えるためである。

もう一つは、日韓がともに手を取り合って向かうべき新たな未来においては、両国が 共有しうる壮大な「共通のビジョン」が必要であり、それはとりもなおさず、西洋近代 文明のパラダイムと、その根幹をなす「西洋クラウド」を超克するくらいのスケールと 文明史的ダイナミズムが必要であると考えるためである。

3段階:文明の東西の差異の更にメタレベルとして、人間、あるいは人類種の共通のク ラウドを理解するための認識領域を、「人間クラウド」と呼称しておく。

前節で示したように、この現実はあくまでも人間の脳機能による錯覚の相対世界であ って、犬や猫や鳥など、それぞれ人間とは異なる認識世界も厳然として存在することは 否定しえない。人間が思う「現実」を、そういった認識の相対性の中に位置づけること で、人間の五感覚脳による認識作用の特徴及び問題点を客観的に考える事ができよう。

この認識領域の問題意識を持つ最大の価値は、国家・民族・宗教や洋の東西の別なく、 人間共通の認識課題がある、という事実を共有することで、相互交流の認識の共通基盤 を、脳機能の本質的限界の外へと広げて構築する必要性を共有することにある。

また何よりも、国家主義や民族主義の認識の次元よりも深化した人間共通の脳の認識 機能の課題を知る、という深層診断の観点を持つことで、その主因を看過したままの国 家・民族主義的な認識の衝突がその本質において本来いかに不要かつ不毛なものである かという客観性を共にできるためである。

4段階:人間の五感覚脳の認識領域と身体的感覚世界を越え、脳の認識作用の外の次元 のクラウドを理解するための認識領域として、心的感覚の「心クラウド」と呼称してお く。学問的には、前述のように現代物理学の M 理論や 5 次元宇宙論、釈迦や老子とい った東洋思想の「空」や「道」といった世界認識の真髄が援用される。

人間の日常の認識や、それの集合体としての人類の歴史の根底に、「人間クラウド」 という認識機能の限界があるのであれば、つまるところ人間は宿命的に、個々の脳の認 識画面の中から自由になれず、永遠に「違う認識から出発し交流する」という不完全な 共通基盤の限界を越えられないことを意味する。

この人間の分別知の根本的限界を越えて日韓交流の最も理想的な共通基盤を確立す

るために、不完全な「現実」の先入観や偏見をゼロ化し、「真実」を基準点とする教育 文化交流を確立することが、両国関係の次の半世紀を希望に満ちたものにするための最 重要の鍵であると考える。

この4段階を踏まえた上で次章からは、最も深い認識領域である第4段階の「心クラ ウド」を共通基盤に新たな日韓の文化交流を活性化させることの意義と方向性を述べる。

# ■3.世界史的視座から観た「共通の課題の確認」

#### § 3-1.近代世界史における日韓両国の歴史的背景

ここからは、日韓両国が目指すべき未来の方向性とビジョンについて論究する。まず は歴史を未来への鏡とするためにも、近代史において日韓両国が歩んできた歴史経緯の 要点を確認しておこう。

**煩雑になりがちな歴史の大勢を構造的に理解するため、上部構造と下部構造、という** 概念で整理する。ここでいう上部構造とは、ある社会集団の運営、経営に対して主導権 を持つ側のことであり、下部構造は、自立性、自発性、主体性が上部構造によって統制、 制限、抑圧される側のことと定義する。

14 世紀イタリアで起こったルネサンス以降、宗教改革、科学革命、産業革命、市民 革命、資本主義の勃興、共産主義の拡大、植民地帝国主義の時代へと、西洋近代文明の 世界的な展開が強まった。19 世紀半ば以降、日本と朝鮮半島は「近代化」という大き な課題に直面し、「近代化」に成功して当時の世界秩序体系の上部構造につけるか、あ るいは下部構造に置かれるか、という国難を迎えた。

日本は明治維新の成功によって下部構造に置かれることは回避できたものの、明治期 を通して不平等条約に悩まされ続けた。また植民地帝国主義時代の一等国として西洋諸 国と肩を並べるポジションを目指す中、結果として朝鮮に対しての上部構造をとるよう になった。客観的事実として、日本が朝鮮の上部構造につく歴史を辿ったことが、現代 にまで続く日韓の相互交流の大きな刺となっている。

ここで、西洋列強(人種差別も含め、アジア全体に対する上部構造)、日本(西洋の 下部構造であり朝鮮の上部構造)、朝鮮(日本の下部構造)という三分類をすると、西 洋>日本>朝鮮、という当時の構造が観てとれる。

このため、朝鮮としての「恨」の対象は直接的に日本に向けられる。また日本は、朝 鮮に対する傲慢・優越感と責任感が同居する状態になり、かたや西洋に対しては劣等感 と羨望と対抗意識が同居するというような、複雑な状態になったと云えよう。

第二次大戦が終了する間際の1945年8月9日、日ソ中立条約を一方的に破棄して侵

略してきたソビエト共産主義の拡張は、その後の北東アジア秩序を運命づけた。半島には日本の敗戦による「光復」が訪れたにも関わらず、朝鮮半島は38度線を境に共産主義のソ連と自由主義のアメリカに分断される結果となった。

1948 年には南北朝鮮がそれぞれ独立を宣言、翌49 年には中国に共産主義国家が樹立し、1950 年6月25日からはスターリンと毛沢東の支援を受けた北朝鮮の南進により朝鮮戦争が始まる。1953年の休戦協定以降、軍事境界線を境に、朝鮮半島は共産主義と自由主義という異なる国家理念と体制に民族が分断され、以後62年間に渡り固定化されている。

一方日本は、1945年9月2日に正式に降伏して後、戦勝国アメリカの占領下に置かれた。占領とは、厳密に言えば戦争の継続状態であるから、日本が主権を回復し占領が終了した1952年の4月28日が、日本の戦争が終わった日である。

19 世紀後半から、西洋近代とどのように対峙すれば良いのかという時代的難題に苦悶しながら複雑な関係性を共に歩み続けた日本と朝鮮は、35 年間の併合時代を経て1945 年からの7、8年の間は、全く異なる歴史を別々に歩み始めることとなったのである。

戦後の日本社会は、思想的には共産主義、自由主義の双方が入り乱れる様相を呈したが、政治体制としては冷戦下で自由主義諸国の一員と位置づけられた。しかし日本は未だ、政治、経済、安全保障上もアメリカと対等の同盟国とは言い難く、アメリカが上部構造の位置を確保している現実があると云えよう。

一方で、冷戦とソ連の崩壊を経て、現在では中国が世界第一の共産主義国家として国力を伸張している。経済体制上は資本主義を受容しているが、北東アジアの政治体制を俯瞰してみれば、西洋が生み出した自由主義と共産主義の理念の下部構造に置かれており、またその二分法の構造下で日韓、日中、南北朝鮮のそれぞれの摩擦と対立が続いている現状が観えてくる。

このように概観した時、端的に云って日本と韓国は、依然アメリカの下部構造であり、 また北朝鮮と中国まで含めた東アジア全域は、共産主義と自由主義という、西洋近代文 明が生み出した思想理念とシステムの下部構造に置かれていると理解できよう。

この構造で捉えた時、我々が真に超克すべきメタレベルの課題とは何であろうか。その課題こそが、日韓両国が未来に共に向かう方向性として掲げるべき、「西洋近代文明の超克」であると本論文では考える。その理由は大きく次の三点による。

1. 東アジアは西洋の植民地帝国主義の支配と、共産主義・自由主義の対立に巻き込まれる 19 世紀以前は、一時的な対立や戦争はあったにせよ、長期的な対立構造や確執は生まれていなかった。近代以降、下部構造におかれながら相互対立化した

「東洋クラウド」の無意識の劣等感と、東アジア秩序を異質なものとした「西洋 クラウド」の問題点を、その恩恵も包括しながら超克するべき必要があると考え る。

- 2. 第二次大戦後、植民地帝国主義の時代が終わり、冷戦とソ連の崩壊、アメリカの 一極化、新興国の勃興、世界の多極化からテロの時代、中国の台頭へと移行する 歴史の大勢にあって、戦後秩序を牽引し、構築した代表であるアメリカのリーダ ーシップと「西洋クラウド」が、国際社会にとって未来創造モデルとしての求心 力を喪失しつつある。
- 3. 啓蒙主義思想以降の西洋近代の政治思想や政治体制が、人間にとって理想的な社 会の創造を形成するのに不完全であったことの根本的省察と革進が必要であるこ と。自由、平等、人権、民主主義といったあたかも人類普遍の価値として認識さ れている理想や理念だけでは、例えばイスラム圏の理念との共存や、多様な国家・ 民族・宗教の衝突や紛争、テロを解決するのに充分ではない。これには根本的には 人間共通の認識課題である「人間クラウド」を越えたメタレベルの共有概念が必 要である。

これらの背景を踏まえると、21 世紀初頭の世界は、ルネサンス以降西洋社会が牽引 してきた文明そのものの大きなパラダイム転換を必要としていると捉えられる。この時 代にあって、近代文明を主導した勢力からすれば下部構造同士である日本と韓国がお互 いの過去やマイナスの側面にフォーカスする交流ばかりでは建設性と発展性がない。

その次元の交流ではなく、より大きな観点から、日韓が主導していかに西洋近代文明 の限界と問題点を補完・進歩させ、世界全体の課題解決と繁栄に貢献できる新たな上部 構造を建設できるか、という未来に向けての共通の座標とベクトルにフォーカスするこ とが、両国にとっての本質的な中心課題であろう。

# § 3-2.日韓協同で具現化させるべきメタ認識による相互交流

このマクロ的課題を考え、日韓協同で具現化させるためには、「今まで」と「今から」 の明確な変化を起こすために、第2章で論じた「共通の認識基盤」によるメタ認識での 相互交流が必要である。

大前提として、これまで私たちは、多様な経験、情報知識、理論や理念といったもの を蓄積し続け、それらを道具に交流することで、よりよい社会、関係性、未来を目指し て努力を重ねてきた。しかしそのアプローチの延長では真の和解や友好、平和や幸福は 実現できず、現在の日韓関係や北東アジアの摩擦と対立の克服、そして西洋近代文明の 超克につながるような新たな上部構造建設の見通しも一向に立たない。

逆に、そのように分別知を蓄積し、知っている世界が増えれば増えるほど、自他に対 するジャッジは厳しくなり、自分の判断基準の受容範囲は狭くなり、結果として、認識 空間の摩擦や衝突は増えるばかりである。これでは相互交流による未来価値創造が生ま れることは期待できないであろう。

これは国と国という大きな関係性に限らず、個人と個人の関係性においても全く同様 の問題である。そもそも身近な家族や友人といった対個人での関係性がなぜ上手くいか ないのか、なぜ喧嘩や対立が日常的に絶えないのかといった問題の正確な診断と処方も できないのに、国と国のレベルの関係性を良好にすることなどできるはずもない。

人間の不完全な脳機能に観点が固定した状態で終わりなく分別知を働かせ、「○×、 善悪、好き嫌い」といった観点の解析で自他をジャッジし続けることが、脳の意識の次 元の「人間クラウド」による交流パターンである。

日本人であれ韓国人であれ、生まれた瞬間から嫌韓や反日を叫ぶ人間など存在しえな い。成長する中で、五感覚からのあらゆる情報データが脳にインプットされ、親、友人、 先生、テレビ、新聞、本、教科書、雑誌、ネットなど多様な媒体によって、自らの判断 能力も育たない乳幼児期から、相手に対するマイナスイメージとして「×、悪、嫌い」 といった判断基準を形成してしまう。

このような集団クラウドに認識能力を束縛させる教育を続けることが、果たして未来 にとって真実に価値ある教育と言えるのだろうか。

「日本クラウド」、「韓国クラウド」といった集団クラウドに無自覚のうちに観点が固 定されているならば、脳によってつくられたその観点をゼロ化することなしには、過去 から自由になり「共通の認識基盤」を持った上での関係性の再創造、再構築は不可能で あろう。

これまでの日韓の音楽、ドラマ、アニメ、漫画、食文化といった文化交流を意識空間 の次元のソフトパワーの交流とするならば、無意識を取り入れたもう一段階深層で、意 識の無意識化、無意識の意識化を活用したスマートパワーの教育文化交流がない限りは、 既存の交流がもたらした成果以上のものは期待できまい。

これは日韓に限らず、異民族への憎しみや対立、あるいは宗教、宗派をめぐっての数 千年にわたる宗教戦争の本質も同様で、五感覚脳に観点・判断基準が固定された「人間 クラウド」の認識次元での交流しかできないことからくる、人間共通の人類史的課題と 云えよう。

だからこそ、この課題を解消する「真実」のメタ認識による新たな日韓関係は、世界 の多様な国家・民族・宗教が衝突し続ける現状に対して、いかにして和解と融合の関係性 構築が可能なのかという成功モデルを示しうる大きな意義を持つ。

第二次大戦後の1946年、二度と戦争の惨禍を繰り返さないようにという願いのもと 創設されたユネスコ(国際連合教育科学文化機関)憲章の前文冒頭には、次のようにあ る。

「この憲章の当事国政府は、この国民に代わって次のとおり宣言する。戦争は人の心の 中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」

まさしくこの憲章にある通り、戦争はまず初めに、「人の心の中」で生まれる。情報、 知識、理論、経験が増えるほど、自分の脳が「×、悪、嫌い」と判断した他者に対して、 許せない、憎い、排除したい、殺したい、といった観点が生まれ、摩擦衝突が終わらな い。そして、その内なる認識空間の戦争が外部空間に反転したとき、物理的暴力となっ て戦争になる。そのため、戦争の根本原因である「観点の問題」をゼロ化する教育は、 決して戦争をしない「平和のとりで」を心の中に築くことができ、人間共通の争いの根 本原因を解消する、最も本質的な世界平和への貢献になる。だからこそ、人間の脳の認 識機能の限界を越える「心クラウド」の教育文化の交流が、なによりも優先すべき本質 的課題だと診断すべきなのである。

これは、これまでの西洋主導の世界認識の基準点から中心軸を移動させ、日韓協同で の新たな基準点による未来価値を確立するという意義に直結する。そして、それをいか に具現化させることができるかということが、次の段階の現実的な課題である。これに はいくつかの角度からの複合的ステップアップが必要であろう。

まず第2章で論じたように、「日本クラウド」「韓国クラウド」に無意識で固定された 半世紀間の摩擦と対立構造の認識領域から自由になる教育革命と教育文化交流が必須 である。次に、近代においてアジアが置かれた状況を、民族感情や国家主義的歴史観か ら自由な観点で客観的に深く理解し合い、「東洋クラウド」からも自由になる認識の柔 軟性と拡張も求められる。加えて、なぜ東洋は西洋の下部構造に置かれることになった のかという深い省察や、なぜ西洋からは普遍性と拡張性の高い多様な学術、科学、思想、 システム、制度、職業、産業が生まれ続けてきたのに、東洋はそれらを学び、真似する 下部構造にしかなれないのか、という自省も必要であろう。そして、西洋の世界認識の 何が根本的に問題で、何を越えていないから世界全体に真実に平和と繁栄をもたらしえ ないのか、という「西洋クラウド」の問題点と、究極的には、国家・民族・宗教に関わら ず、人間共通の課題である脳機能の認識の問題点を放置したままの「人間クラウド」の 認識次元をいかにメタ化するのか、という課題があろう。

これらの多様な問題意識と課題の遂行への基本軸は、シンプルにたった一点に収斂さ せる事ができる。それは同時に、日韓発の新たな基準点を確立させる絶対要因でもある。 その一点こそが、「日本クラウド」「韓国クラウド」「東洋クラウド」「西洋クラウド」

「人間クラウド」の全ての問題点を一度完全なゼロベースまで戻し、人間の脳の認識の 不完全性を越えた「真実」の「心クラウド」を活用する教育革命の一般化である。

その内容と現実的価値と実社会変革への道を明確に示し、実践するために、どんなア ジェンダ・セッティングが必要で、どんな未来ビジョンが求められるのかということを、 次章以降で述べる。

# ■4.課題解決に向けた「共通のアジェンダ・セッティング」

#### § 4-1.21 世紀の時代的重要課題「人間の再定義」

日韓が前章の共通課題を解決し、また新たな価値を個人と世界に提示するための、「共 通のアジェンダ・セッティング (談論設定)」について考えてみよう。

両国がこれからの世界に共通して貢献すべき大きく深い談論の設定をすることは、西 洋近代文明の根幹を問い直し、新しい未来像の提案をする上で非常に重要である。なぜ ならば、アジェンダ・セッティングとは、我々がどんな未来価値に向けて意識をフォー カスするべきなのかという、「問題意識と解決の方向性を規定する力」を意味するから である。

また現実的に西洋近代、というパラダイムを超克する上では、今の近代文明の秩序や 葛藤、 問題を生み出しているその根源はどこにあり、いかにしてそれを乗り越えるの かという、 本質的なアジェンダ・セッティングは不可欠であろう。

中でも最重要の命題は、人間とは何なのか、どんな関係性を結び、いかに生きるべき なのか、という「人間の再定義」であると考える。なぜならば、教育、科学、経済、政 治、文化など複雑多様に進化した近代文明の発展要因を突き詰めれば、それらは全て人 間の、人間による、人間のための行為の蓄積に他ならず、そうである以上、「人間の再 定義」という本質命題を曖昧にしたままの表層的な変化をこれ以上追い求め続けること は、現象論的な変化の域を出ないからである。

実際、西洋近代における過去の「人間の定義」という命題について考えてみよう。西 洋社会で啓蒙主義思想が花開いたことで、人間とは何なのか、どんな関係性を結び、い かに生きるべきなのか、という人間理性の働きは、飛躍的発展を遂げた。人間本来の理 想的なあり方、という命題への探究心が、ルネサンス以降の教育、科学、学術の発展や、 アダム・スミス以降の資本主義経済の発展、それのアンチテーゼとしての共産主義の胎 動、また市民革命による民主主義の確立や全体主義などをもたらしている。

そういった歴史の流れに対して、未来の社会秩序を考えるという観点から注目すべき 最も象徴的な事象は、「人間の権利」を明確に打ち立てた 1789 年フランス革命の人権 宣言における「人間の定義」であろう。それはいうなれば、封建主義体制で国王を頂点 とした上部構造による「国王の全体主義」から脱し、個々人が上部構造を志向すべきと いう「西洋的な個人主義」へのパラダイム転換であった。

人権宣言によって彼らが成し得た「人間の定義」とは、上部構造によって決定され抑 圧された人間存在の人格と意思決定権利、そして人間の尊厳性を反転させ、啓蒙主義思 想と権利思想に象徴される一個の人格としての「個人」の確立であったろう。

しかしそれは同時に、自我の増長と私利私欲の追求を是認する「個人」という側面も 合わせ持ち、それにより「個人」の成功と幸福追求の中での物質主義、科学主義が地球 を覆っていったのが、今日我々が享受し、また翻弄されている近代文明だと言えよう。

これを「正-反-合」の構造で観た時、「正」に当たる「国王の全体主義」に対するア ンチテーゼとしての「反」を「西洋的な個人主義」と観ることができるが、実は日韓を 含め人類文明は未だにこの「正―反」の状態に留まっているという大きな課題がある。 ここで重要になるのは、「人間の権利」を確立させた西洋の個人主義的人間観の問題 と限界を越える「合」としての新たな「人間の再定義」 をいかに確立するか、という アジェンダ・セッティングである。

実際第2章でふれた現代の脳科学や物理学の結論を人間に援用してみると、身体的 節囲だけが自分、と認識していた「自己」の概念は、既に強烈に崩れつつあるのである。

また現代科学技術は、IT・ロボット技術、AI、ナノテクノロジー、バイオテクノロジ 一の急速な進化に伴い、脳神経細胞の電気信号作用を IT と連結させることで、脳が認 識する「個人・自我」の意識そのものの変容を起こす蓋然性がある。脳の電気的データ がデジタル情報空間と相互作用が可能になることで、自分とは一体何なのか、人間とは 一体何なのか、という「アイデンティティの危機」、「自他の認識崩壊の危機」という時 代的課題までをも招来しかねない。最も本質的には、人間のレゾンデートルそのもの、 「人間の尊厳性の危機」という難題に直面していると云えよう。

そのような時代背景もあいまって、これまでの西洋の個人主義と物質主義、科学技術 だけを中心とした教育、経済、政治のパラダイムでは、長期的に観て未来社会に希望が 広がっていくとは考え難いのが現代社会の現在地であろう。

西洋の学術と科学技術による教育では、生活の便利さは向上しても、このような今の 時代の人間存在と人間の関係性の問題・限界には対応できず、日本だけを観ても、中央 行政から大企業への直接的指導が必要なほどに、爆発的な鬱の蔓延、そして自殺や殺人 の予備軍とも言える精神不安定者が増えている。

深く安定した心の平安や生きることの喜び、また社会的知能や主体性・創造性を向上 させる教育が不足欠如している現状も鑑みれば、「西洋的な個人主義」教育からの大転 換を可能にする新たな人間観が必要であろう。

また、個人主義と同根の問題である国家民族中心主義の教育がもたらす問題も、対症 療法ではなく根本解決の路線によって解消されるべき時代的課題である。個人エゴ、国 家エゴレベルの自己認識を越え、本質深いアイデンティティ共有により新たな関係性を 結ぶことにつながる「人間の再定義」という巨大な談論設定は、両国にとって喫緊の課 題と考える。

世の中を変えるのは人間であり、人間を変えるのは教育である。「西洋クラウド」か ら誕生し世界に普遍化した人間観と、そして人間の五感覚の脳の初期設定の本質的限界 である「人間クラウド」を越える「心クラウド」の教育文化交流なくしては、本当に斬 新で未来価値のある交流と未来ビジョンは生まれないであろう。

日韓のこれからの教育文化交流は、メタ認識による新たな人間観を確立し、人間存在 の価値を最高に昇華させる人間の「絶対尊厳」を基盤とした社会へのアジェンダの具現 化を目指すべきである。

# § 4-2.「正-反-合」を完成させる関係主義パラダイム

前章で日韓の歴史背景からくる北東アジア情勢の現状を整理したように、日韓は西洋 近代が生み出した共産主義と自由主義という二大対称勢力の下部構造に置かれている。

日本は敗戦後から現代まで、特に経済、安全保障、政治の意思決定などに大きくアメ リカの影響を受け、冷戦期もそれ以後も、西洋が生み出した自由主義勢力の一部になっ ている。しかし現在、北朝鮮と中国との外交・安全保障上の緊張状態が高まり、共産主 義勢力との摩擦、対立という構造的な課題も抱えている。

韓国は政治体制的には分断後自由主義側となっており、やはり経済、安全保障、政治 の意思決定などに大きくアメリカの影響を受けている。しかし経済的な結びつきと歴史 認識を巡る協調路線としては中国との関係性も重要で、アメリカと中国の狭間でのバラ ンス感覚に非常に苦心する状況と観て取ることができよう。

日韓は本質的かつ構造的に、共産主義と自由主義の対称性の下部構造としての位置を 脱却することができず、その間で常に意思決定を迫られるという類似の課題を抱えてい るのである。

そしてさらに、自由主義の理念を押しすすめたアメリカと、共産主義の理念を改変し ながら台頭している中国が国内外にもたらす大きな影響を考えたとき、これらを補完し、 国際社会全体として進歩可能な Win-Win,All-win の新たな基軸理念が生まれない限り、 思想、イデオロギーという「集団クラウド」の認識空間で摩擦、対立、競争を繰り返す 今までの文明社会を越えられないという課題がある。

だからこそ日韓から、自由主義・個人主義の限界、そして共産主義・全体主義の限界を

補うための、新たなアジェンダ・セッティングを問うことが必要なのである。それには、 自由主義と共産主義という「正-反」の対称性を底上げし、新たな国際協調創造のため の上部構造を目指す日韓からの「合」のパラダイム転換を起こすことが緊要で、それは 言うなれば「関係主義パラダイム」という表現に含意できるものである。

21世紀の個人と社会の関係性は、スマート技術、AI の進化、IoT(Internet of Things) などの潮流も手伝って、すべてがひとつにつながりあうハイパーコネクション時代の中 で構築されるものである。またここまで論じてきたように、脳神経科学、最先端物理学、 脳と IT の連結などが導き出す人間観は、皮膚と粘膜で覆われた境界線の範囲内として 規定される既存の身体的人間観を大きく覆すものになることが徐々に常識化される未 来が予測されうる。

このような時代そのものの人間への地殻変動がある中で、旧来の「西洋クラウド」が 生み出した思想やイデオロギーを越えられない旧い「東洋クラウド」の中に日韓が留ま り続けるべきではなかろう。

脳機能に固定された「人間クラウド」の個人主義がもたらす問題の最たるものは、自 他の「違い」を強烈に認識する分離思考を土台とし、自分の不完全な判断基準で独善的 に他者を裁く「観点の問題」に無自覚のまま、肥大化する欲求と関係性の摩擦、対立を 終えられない点にある。

一方、個人の認識・判断・意思決定を優先することを下部構造に置き、全体としての一 般意思と行動統制をシステム化する上部構造で個人を抑圧する全体主義では、人間の尊 厳性が完全に毀損されてしまう問題点がある。

この対称性の矛盾を越えるには、個人の絶対尊厳を完成させる「人間の再定義」と同 時に、エゴ主義の個人を完全にゼロ化しながらも調和性と尊厳性のあるひとつながりの メタ全体性を共存可能にする、これまでにない概念、イメージが重要なのである。

そのために、「自分と自分の宇宙が有る」のが前提の五感覚脳の認識を基準とした自 他分離の身体的感覚を越える、心感覚、「心クラウド」のメタ認識の共通基盤による教 育文化交流が必要になってくる。

不完全な脳の認識レベルでのこれまでの「個人」のイメージを基準点とした個人主義 (我)をどう超克し、関係主義(和)をいかに広めるかというこの本質的なアジェンダ ・セッティングを企図することは、21世紀の未来社会で、東洋文明が本来有している本 質深い普遍性を現代化して世界に広げるという使命において、非常に大きな意味を持つ。 欧米には、資本主義やキリスト教のように、世界に対して普遍性を持って広げられた 要素が強くあるものの、日韓の弱点としてそのような普遍性を持った具体的発信内容に 乏しく、またそれも影響して、グローバルリーダーを育てる独創的エリート教育が欠如

している問題がある。

西洋は近代革命を成功させて数学、物理学、経済学等を通して普遍的に自分たちの世 界観とシステムを広げることに成功し、また弁護士や会計士といった専門職、車や IT といった産業も、西洋由来のものばかりである。

これから日韓は、なぜ東洋からはそのような社会創造の源泉となるオリジナリティを 生み出せなかったのかという省察も踏まえ、軍事、政治、経済ではなく、今までにない 概念、機能、イメージを取り入れた本質深くからの教育スマートパワーの進化に取り組 まなければならないであろう。そして、その教育革命による関係主義で、これまでの東 洋と西洋の限界を越えて行く新たな日韓の方向性を開いて行くことが重要と考える。

国家と国家の外交関係、外交能力は、本質的には個人と個人の人間関係、関係構築能 力のメカニズムと同様であるから、個人の関係性構築能力を高める必要がある。そのた め日韓 VISION 同盟の活動としては、国家・民族・宗教の観点を越えた「心クラウド」を 共通基盤とし、人間の絶対尊厳、という再定義を共有土台として、21 世紀のグローバ ル人材に必要な人間力・人間関係力の育成を推進している。

20 年間の着実な開発と実践を通して民間レベルでの日韓の相互理解は確実な成功モ デルができており、現実的な実践と成果として、日本の若者は韓国の独立記念館や戦争 記念館、板門店を訪れて学び、韓国の若者は靖国神社や遊就館を訪れて日本の近代史の 観点を理解し、両国の立場、アジアの運命、アジアの涙を深く共に感じあい、そこから 共通のビジョンを考えるという、奇跡的な教育文化交流が実現している。

個人の絶対尊厳を確立し、集団クラウドに支配されず、同時に深い相互理解と協力体 制、チームプレイにより全体の質を進化させる関係主義パラダイム確立のアジェンダ・ セッティングを具現化する道が、未来をリードするための重要命題になるであろう。

## § 4-3.ソフトウェア競争時代の言語の最終主導権

21 世紀以降の時代の趨勢を考える際、日韓から人間の認識機能を進化させる新たな 教育文化交流を活性化させる価値について、別の角度から考察してみよう。

アメリカのオバマ大統領が「すべてのアメリカ人に学んでほしい言語がある」と呼び かけた言語がある。それは英語や中国語、科学方程式の記述言語などではなく、「プロ グラミング言語」である。プログラミング言語を学ぶ人材が増えることは、アメリカの 未来にとって、情報知識社会の設計者、創造者を輩出し勢力化することが、雇用や産業 はもちろん、世界覇権の主導権争いにとっても重要だからであろう。

アメリカの IT 革命を代表する IBM、マイクロソフトから Apple へと、ハードウェア の小型化とソフトウェアの高性能化は、驚異的な進化を遂げてきた。そのようなコンピ ューターの進化がもたらす未来社会に必要なアジェンダ・セッティングを考える上では、 ソフトウェアの開発能力につながる「プログラミング言語」の主導権争いを理解するこ とが重要である。

今、超大国であるアメリカと中国がソフトウェア市場の激しい主導権争いを繰り広げ ている。中国は規制を使って物理的にグーグルやフェイスブックを遮断し、自国民 13 億の巨大市場に対して防御壁をつくりあげている。かつて万里の長城を築き、外敵に備 えながら中華文化を育てた歴史に習うかのごとく、サイバー長城とも皮肉られるウォー ルによって、不都合な情報やサイトをブロックしながら、13 億人が満足できる製品を 作り、力をつけていく国策である。

またアメリカは大統領が呼びかけるほど力を入れながら、親会社にアルファベットを すえる組織改編を進めたグーグルなどは特に AI の研究開発において、全世界の天才や 関連企業を自社に取り込み、IT ソフトウェアの新境地を切り開こうとしている。

このような潮流の中、日本と韓国のポジションは、最先端を開発するアメリカ、そし て強力な経済力と共産党政権による強い政治意思決定能力を有する中国の後追いしか できないという現状があろう。

ソフトウェア競争の後塵を拝することは、文明の最先端を牽引しルール・メイキング を行う上部構造に対して、日韓がずっと下部構造に置かれ続けることを意味する。

終わりなく進化を遂げる IT が我々の生活と切っても切り離せなくなる中、日韓はど のような方向性を持って未来へ歩む必要があるのか、どのような戦略と教育を持って、 未来を担う人材を教育して行くべきなのであろうか。

日韓は、これまでのようにただ西洋を模倣し追従するような道を選ぶのではなく、ア メリカや中国が目指すその先まで洞察し、彼らの見落としている最も重要なイノベーシ ョンを日韓協同で取り組む道を開拓してみてはどうだろうか。

実際、実はアメリカと中国が見落としている、最も重要なイノベーションがある。 それは IT 空間のコンピューターソフトウェアの開発に留まり、人間におけるソフト ウェアと言える認識空間のイノベーションの必要性に着手できていないということで ある。

人間の認識能力を高める教育が不在のまま IT の進化が一人歩きしていけば、資本主 義の論理での経済効率性と合理性の観点からは、労働力としての人間の存在価値は減退 する。また、ITと人間が繋がり、意識や記憶情報がコンピューターへアップロード(マ インドアップロード)されることによって、自分の肉体以外でも意識の実行がおきる未 来、何をもって「自分」を定義すればよいのかという問題が顕在化する蓋然性は非常に 高い。

前述のように、自分の身体的範囲を「自分」であると思ってきた「人間クラウド」の 常識的定義が崩壊する未来は遠からず到来する。そうして情報と肉体の境界線が無くな

っていく先には、自分をどのように定義すればよいのか、人間をどう定義すればよいの かというアイデンティティの問題は必ず起こるであろう。だから「人間に対する再定義」 というアジェンダ・セッティングが必要な時なのである。

この時代の趨勢にあって、一人歩きする IT、科学技術の進化に包括的に対応できる 「認識技術」によって、意識や思考を生み出すメタ認識に対しての教育イニシアチブを 獲得することは、大きな意義を持つ。

それは、日韓から革命的な次世代ソフトウェアである、「トータル OS」を誕生させる ビジョンにもつながる。トータル OS は、IT (コンピューターOS) と人間意識(認識 OS) の融合の先に必要な上位 OS を指すもので、この「トータル OS」の誕生によって、 人間と AI の平和的融合が可能になり、ソフトウェア戦争は、共創へと変わっていく道 が開ける。

本来これは、この融合をもたらす根拠となる技術と、新しい言語体系の開発に成功し なければ着手しえないテーマであるが、プログラムとして書かれた情報が平面画面に画 像や音として映し出されるのと同様に、私たちが今見ているこの宇宙の姿も、第2章で ふれたように実は「情報を脳が認識処理した結果態」としての立体認識画面に過ぎない。 よって、コンピューターのプログラム情報と私たちの認識する情報や意識情報を包み 込む、高次の言語表現ができれば、トータルOSを創ることが可能になるのである。

そのためには、コンピューターの作動原理と、宇宙自然の作動原理、意識の作動原理 をひとつのパターンで記述できる「メタ言語」が鍵になる。しかし通常私たちが使うこ とのできる言語は、コンピューターを作動させるプログラミング言語であり、科学者達 が宇宙自然の法則を記述する数学言語であり、意識に関しては定量化できないので自然 言語で語るしかない。

そのように「現実」の中でバラバラの言語で語っていては、トータル OS を完成させ ることはできないため、それらすべてを包括した原理を理解し、また記述できる、メタ 言語が絶対的に必要なのである。

そのため、M 理論で導かれるように宇宙全体の生滅現象を司る「真実」の世界を基準 点に言語化した「イメージ言語」の活用領域を日韓協同で研究し、他分野への事業開発 を推進する現実的なアジェンダ・セッティングは、日韓からソフトウェア競争時代の言 語の最終主導権を確保し、調和のとれた世界の繁栄と発展に寄与する大きな可能性へと つながると云えよう。

# ■5.未来に向けた「共通のビジョンの策定と実践」

#### § 5-1.メタ認識開発時代の最先端を主導する「基軸教育」

あらゆる交流が持つ行為の本質的意義のひとつは、未来に向かうビジョンを生み出す ことである。両国の未来志向の関係性を考える上でも、力強い協力体制で共に手を取り 合えるビジョンをどのように策定し、それを順次どのように具体的実践化して行くのか というテーマはとても重要である。

特に、グローバル化が進み多様な課題が山積する21世紀にあって、日韓両国の関係 性にとって決定的に欠落している最重要の問題は、「共通のビジョン」の不在である。

国家の役割や各国家の歴史伝統、尊厳を大切にし合うことは大前提として、国家とい う枠にとどまらずに、アジア全体の新しい秩序をどう構築すべきか、そして世界全体の 新しいパラダイムをどのように確立していくべきかというテーマに通ずる「共通のビジ ョン」が、今こそ必要であろう。

そこで、日韓両国が次の半世紀に向けて持つべき共通のビジョンについて、教育、経 済、政治の3つの分野においての方向性とロードマップの要点を考えたい。

日韓が主導して取り組むべき中核のビジョンは、全世界のグローバルスタンダード教 育となりうる「基軸教育」の確立と具体的展開である。以下、その理由と現実化へのロ ードマップを提案したい。

まず何よりも、日韓両国が認識の本質的問題を看過したままの文化交流を半世紀続け、 次の半世紀への具体的展望とビジョンが明確に観えてこない中、不完全な人間五感覚脳 の認識機能にとどまらず、「共通の認識基盤」確立を基準点とした教育文化交流へと文 化交流のメタ化を押し進めることが、両国関係の最適化への鍵であろう。

国家中心主義の教育とリーダー育成ではなく、前述の日韓の若者のように、「集団ク ラウド」の観点から離れ、お互いの国の痛みと誇りを理解しあう認識次元の進化なしに は、真実に理想的な文化交流は実現しえない。そこから、関係主義によるアジアのリー ダーシップ、世界のリーダーシップをいかに自分たちがとるか、というようにアイデン ティティと心のスケールが大きく広がった人材が育成されていく。

現実的に日韓両国とも、物質文明が成熟し、モノ、カネ、情報が飽和状態の中での過 度の学歴競争がもたらす既存の教育の中で、鬱や引きこもり、自殺などの心の病の増加、 家族や共同体などの関係性の希薄化といった問題を経験してきており、それを補うため にも、「人間の再定義」による尊厳性の完成と尊厳関係の確立を推進できる新たな教育 文化の拡充は必要不可欠であると考える。

また韓国では、セウォル号事件をひとつの契機に国家レベルでの取り組みが着手され た人性教育の策定と実践において何より重要な、効果的な「教育コンテンツ」の決定・

推進ができない現状がある。それが意味することは、これまでの東西文明の思想、哲学、 宗教の中にはそのモデルはもはや見出せないということであり、同時に、西洋から学び 続けた「西洋クラウド」を越える必要性に直面しているということではないだろうか。 そうであるならば、逆に自ら、過去の歴史上にない新しい「基軸教育」を確立し発信し ていく気概と意思があってしかるべきであろう。

西洋の科学理性の究極である最終理論と東洋の悟性を、全宇宙に共通するたったひと つのデジタル認識パターンで統合し、理解、応用可能にした世界最先端の「認識技術」 を活用し、心感覚、「心クラウド」の開発へ着手することは、現実的な国家競争力とい う観点から見ても、大きな優位性、先見性を発揮するものである。

また、AI、ロボットの開発、ソフトウェア戦争が過熱し、人間のアイデンティティ、 存在意義、雇用、関係性のあり方などについての根源的な再考が求められる中、「イメ ージ言語」を活用し、この現実の認識画面が生まれる仕組み通りに人間の創意性、創造 性を開発する教育のイノベーションは、来るべき超高度情報社会における人間教育とし て、国家・民族・宗教を越えて共有可能な「基軸教育」になりうる。

なぜなら、例えばニュートンの運動方程式が全世界の物理学者に共有可能で、同時に 必須知識になるように、この自然界の普遍的な仕組みや法則性は、全世界にスタンダー ド化されるからである。

日韓から、宇宙自然の作動原理、意識の作動原理、コンピューターの作動原理すべて に通じる「真実」の世界の仕組みを世界にスタンダード化する挑戦は、両国の未来にと って大きな価値を生み出すものであろう。

#### § 5-2.資本主義経済と先進国の罠を突破する「Edunomics」

次に、日韓の「共通のビジョン」としての新たな経済大陸の開発の提案である。もと もと両国とも、天然資源に乏しくさほど領土も大きくない中、同じような産業構造で世 界経済において大きな存在感を示すようになった。しかし日本は 1990 年代のバブル崩 壊以降、そして韓国は 1997 年の IMF ショック以降、経済活動の実態は金融資本主義 の経済プレートの下部構造に置かれるようになった。

耐久消費財がほぼ社会に行き渡った先進国は、経済活性化の本質的要素である「消費 需要の活性化」が起こらず、消費マインド、という経済発展エンジンの根本原理が弱体 化する「先進国の罠」に陥っている現状がある。

その中で、人間よりもお金の価値が上部構造を取るようになった金融資本主義の問題 もあり、また産業の最先端であるスマート技術とソフトウェアの主導権をアメリカ、中 国の二大強国に握られている以上、日韓両国は経済開発の主戦場を全く異質な領域へと 規定し、転換させる経済戦略が求められよう。

前節の教育のイノベーションの必要性から考えても、21 世紀の経済開発の最重要の 投資先は、「人間そのもの」に大きくシフトしていく蓋然性が高い。農業革命5000年、 イギリス産業革命 200 年、アメリカ IT 革命 30 年、スマート革命 10 年と、経済活動に おける文明の中心軸の変遷は、指数関数的な変化を遂げている。ここからさらに進むロ ボット化、機械化の波の中で人間社会が必ず直面せざるをえないのは、人間の「再定義」 と人間の認識空間の開発を可能にする教育産業であろう。

土地(空間)の開発、資源(存在)の開発、情報空間の開発の次は、意識空間の開発。 日韓からの人間開発の革命、メタ認識への「認識革命」をもたらす教育と経済の融合 (Education×Economics=Edunomics) を経済開発ビジョンとする「認識経済」活性 化への取り組みを勧めたい。

前節の「基軸教育」の必要性と未来価値についての認知度を日韓両国で広めることで、 それに従事する新たな職業と雇用創出も創造可能になる。教育コンテンツが明確に確立 されれば、学校、家庭、企業、各種法人など様々な社会的ニーズに合わせながらメタ認 識のコンサルタントが従事する仕事の幅は拡大していくであろう。情報技術の開発が、 既存産業すべてを効率化し発展させたように、認識技術の開発は、経済活動の基本単位 である人間の認識・判断・意思決定能力の底上げから、既存産業すべての効率化と発展へ と連動していく。それが「認識経済」のロードマップである。

特に第二次大戦以降のブレトン・ウッズ体制下のもと、ドルを「基軸通貨」とするア メリカの金融政策に世界経済が大きく左右されてきた資本主義のシステムに対しては、 多くの識者が改変の必要性を研究提示している。

個人のエゴを認める「個人主義」から出発した弱肉強食の自由主義経済がもたらした 強烈な格差は、ウォール街占拠のデモやギリシャの経済危機をみても、世界的な課題で ある。

近代経済学と経済システムそのものがイノベーションを余儀なくされている以上、経 済活動の基準点を明確に「人間の尊厳性」に置き、個の成功ではなく場全体の関係性の 成功を重視する人本主義経済の具体的策定が必要であり、それはその前段階としての教 育のイノベーションと、教育と経済の融合があって初めて実効性を持つようになる。

また IoT が加速度的に進展し、すべての情報データがつながりあっていくハイパー コネクション社会の到来を控え、経済システムの基本も、プラットフォーム化の進展が 著しい。

情報インフラは全世界を覆い、コンテンツ産業が成長していくであろう知識基盤社会 の趨勢を考えた時、最終的に必ず問われるテーマは、コンテンツの価値と汎用性になる であろう。アニメや漫画やゲームアプリといったコンテンツだけではなく、固定観念に 縛られないメタ認識によって人間のインスピレーションを刺激し続ける教育コンテン

ツの開発は、時代的ニーズにも直結する。

また情報が爆発的に氾濫する時代であるからこそ、その情報の海を統合的に俯瞰し、 情報知識の要点をメタ視点で統合整理可能な「認識力」を高めるコンテンツは、全世界 的な大きな経済ニーズの開拓に有用のものであろう。

新たに消費マインドを刺激するには、消費の本質である人間の欲求欲望を刺激する必 要があるが、個人主義と物質文明の延長のエゴ的な欲求ではなく、人間の尊厳性と尊厳 関係にもとづいた尊厳社会を創造するための気づき感動が溢れる、美しく巨大な欲望、 新しいニーズへの刺激と喚起が必要である。

日韓両国は、現代の経済秩序と現代文明の本質的、構造的行き詰まりを打開するくら いの壮大で偉大なビジョンを描かない限りは、本当に共有可能な大きな未来エンジンが 稼働しない。日韓が共に手を取るべき経済開発ビジョンは、両国が現在抱える社会の諸 課題を深く長い視野で解決していく価値と、同様の経済構造で社会に活性化を失ってい るアメリカをはじめとした先進国の罠を突破するためにも、世界的な貢献価値を持つも のになるであろう。

その道への意思決定の鍵は、過去からの発想と過去の延長上での対症療法を継続する のか、斬新な常識破壊と前人未到の跳躍によって未来からの発想での経済政策に着手す るのかが、大きな分岐点となる。

#### § 5-3.日韓発の新たな普遍理念「尊厳民主主義」

新たな「基軸教育」の確立と展開は、日韓発の新世界秩序のグランドビジョンへの大 きな力となる。なぜなら政治思想と政治体制の根源には、人間をどう思うか、という、 「人間の定義」という問題が深層に横たわっているからである。

例えば国王を中心とした封建主義時代の西洋では、生まれながらに人間の価値は完全 に固定されていた身分制が当然であった。そこで下部構造に置かれた市民たちは、人間 の尊厳性、人間の基本的権利を求めてフランス革命を起こし、政治への参画の主権を手 にする大きな変革を起こした。

日韓が次に起こすべきは、脳機能に固定された体感覚、「人間クラウド」を基準に生 まれた西洋の全ての政治パラダイムを補完・進歩させる道であると考える。

国王の全体主義(正)に対する西洋的な個人主義(反)を命がけで屹立させ、その普 遍的価値を全世界に展開したのは西洋の力である。そして究極的な個人の完成である 「合」の人間観とは、その存在が一切比較不能で、どんな条件にも束縛も影響もされな い「絶対尊厳」の確立によって完成する。

そこには、脳の認識の次元を越えた客観的絶対真実である心感覚を開き、メタ認識を 獲得した「心クラウド」を基準に、従来の観点の短所を補い、長所を伸ばす方向性の提 示が求められよう。フランス人権宣言による人間の定義を越え、日韓の教育革命、「基 軸教育」による真実の人間の再定義により「絶対尊厳」を新文明の起点として、日韓か ら「尊厳宣言」を発信していくべき意味はそこにある。

また、個人を権力によって押しとどめて全体性を優先させる全体主義の限界を補うに は、すべてがひとつにつながった真実在であるメタ次元のハイパーコネクションの全体 性にまで、心の感覚が拡張される必要がある。そこではじめて、「個であり全体」とし ての尊厳主義が成立し、全ての存在の尊厳性を生かし合う、Win-Win,All-Win の関係主 義が胎動する。

近代史において植民地帝国主義の時代は、植民地化される対象となった地域や人種の 尊厳性が破壊され、第二次大戦後に植民地独立運動が一気に広がるようになった。しか し大戦後の世界構造は、共産主義(正)と自由主義(反)の二大対称に置かれ、ソ連の 崩壊によって国際社会の対立構造としては消失したものの、精神的、思想的な対称構造 は世界的にも未だ解消していない。この問題に対しては、両方の長所と短所を補完進歩 させ底上げできる、メタレベルの新しい政治の力点(合)を作動させる必要性があろう。

これに対して、日韓協同の新たな理念の提唱として、尊厳主義、尊厳民主主義を提案

社会的抑圧からの解放と近代的権利の獲得による自由主義は、人間の精神と人間社会 の秩序を美しい自由に満たすには不十分な結果を招き、エゴとエゴの衝突による多くの 社会課題が解消される道は見えない。

また、自由競争がもたらした多様な格差による新たな抑圧体制からの反のエネルギー として19世紀に生まれ、20世紀に全世界を覆った共産主義も、真実の平等をもたらす ことはなく、社会の活力の低下や成長の鈍化、そして強烈な支配構造で逆に人間の尊厳 性を破壊するシステムとなってしまった。

これは根源的には近代的人間観と、自由と平等という相矛盾する対称性の思想の枠の 中で社会変革を推進したことの限界であり、根底的には不完全な認識、判断、行動の基 本単位である体感覚、「人間クラウド」の問題である。

人類が近代史においても越えることのできなかったこれらの「集団クラウド」の観点 をゼロ化し、新たに再創造する Next Renaissance の道は、真実の自由と真実の平等が ひとつに融合しているメタ認識の尊厳主義を新たな柱とすることで、補完:進歩への道 筋をつけることが可能になろう。

だからこそ、「心クラウド」の共通の認識基盤をまず日韓両国が形成し、それによる 和解と融和のモデルを世界に提示しながら、「尊厳民主主義」の価値を実践とともに提 示できることは、西洋近代文明の教育、経済、政治のパラダイムを超克していく壮大な るビジョンとなって行くものである。

# ■6.結論

日韓国交回復50年、そして第二次大戦終結から70年を迎えた2015年以降の日韓 関係に求められる要点は、「問題意識と解消法のメタ化」と言えよう。

なぜ従来の文化交流と両国の議論、交渉が、十分な相互理解と信頼構築に至らなか ったのか、という過去への問題意識。

そして、日韓の交流のあり方と、これから両国はどんな時代的課題に対して、どん なアジェンダ・セッティングを行い、どんなビジョンによって現実の課題解決は可能な のかという、未来への問題意識。

この過去と未来の問題を同時に解決していくための転換の鍵は、そもそも大前提と なる認識・判断・意思決定の基本単位である人間共通の脳機能の「認識」のメタ化であ る。

これまでの日韓交流の本質的限界とは、お互いの文化や歴史に対する知識、情報、 データ、論理、思い、姿勢に対する不理解が根本原因だったのではない。それら全て を生み出す脳の認識機能が根本問題なのであり、だからこそ「観点の問題」というメ 夕問題を解消できることで、これまでの問題が自然に消えて行き、問題が問題ではな くなるという劇的な変化を促すことができるものである。

認識の不完全性を前提にした問題意識と解決方法では不完全な結果しかもたらさな いことは理の当然であり、しかし逆に言えば、問題の根本原因を突き止め、そこを解 消できる方法論と実際の効果が既に生まれている現代は、確実に次の半世紀への希望 の灯火となる可能性が生まれている。

私たちは今、世界認識のコペルニクス的転換である、脳の認識機能を越える世界へ の基準点革命を必要とする時代を迎えているのである。それは、新しい世界認識と教 育、経済、社会システムの創造につながるアジアのルネサンスであり、西洋文明の努 力と恩恵を補完して底上げして行く、ネクスト・ルネサンスへの道でもある。

日韓両国の摩擦と衝突の半世紀に終わりを告げ、メタ認識の教育文化交流を土台と した新たな教育、経済、政治の創造的ビジョンでの協同関係を結ぶことが、日韓新時 代への確かな道程となるであろう。

# ◆参考文献

木宮正史·李元徳(2015)『日韓関係史 1965-2015 I 政治』東京大学出版会

木宮正史·李元徳(2015)『日韓関係史 1965-2015 Ⅱ経済』東京大学出版会

武藤正敏 (2015)『日韓対立の真相』悟空出版

伊藤之雄(2011)『伊藤博文をめぐる日韓関係:韓国統治の夢と挫折、1905~1921』ミネルヴァ 書房

姜尚中・木宮正史(2013)『日韓関係の未来を構想する』新幹社

池明観(1999)『日韓関係史研究』新教出版社

名越二荒之助編著(2002)『日韓共鳴二千年史』明成社

ミチオ·カク (2015)『フューチャー·オブ·マインド-心の未来を科学する』(斉藤隆央訳) NHK 出版

ミチオ·カク (2012) 『2100 年の科学ライフ』 (斉藤隆央訳) NHK 出版

レイ・カーツワイルほか(2007) 『ポスト・ヒューマン誕生・コンピュータが人類の知性を越えると き』日本放送出版教会

トマ・ピケティ (2014) 『21 世紀の資本』 みすず書房

盧在洙(2006)『コミュニケーション革命』Peace Production 有限会社

盧在洙(2006)『学校革命』Peace Production 有限会社

盧在洙(2008)『国家革命』Peace Production 有限会社

盧在洙(2012)『観術で生かす日本の和心』Peace Production 有限会社

V.S.ラマチャンドランほか(2011)『脳の中の幽霊』(山下篤子訳) 角川文庫

前野隆司(2011)『錯覚する脳「おいしい」も「痛い」も幻想だった』ちくま文庫

クリストファー・チャブリスほか(2014)『錯覚の科学』(木村博江訳)文春文庫

池谷裕二(2013)『脳には妙なクセがある』扶桑社新書

福岡伸一(2009)『世界は分けてもわからない』講談社現代新書

石山喜章(2015)『世界が一瞬で変わる潜在意識の使い方』あさ出版

大川知之・内海昭徳(2014)『みんなの夢がかなうハイパーコネクション都市-わくわく尊厳シテ

ィー』Peace Production 有限会社

#### 著者プロフィール

**盧 在洙** Noh Jesu / ノジェス

日韓 VISION 同盟

韓国代表

NRグループ代表

NR JAPAN株式会社代表取締役社長/株式会社NR KOREA代表取締役社長 ピースプロダクション有限会社代表取締役社長

#### 観術創始者

韓国テグ出身。嶺南大学環境大学院環境工学科卒業。20年間武術と瞑想修練を重ね、太極拳の国際コーチ資格を履修。武術道場と幼児教育サービス会社を同時に経営。1995年来日。1996年、福岡で宇宙森羅万象共通の変化パターンを発見し、「イメージ言語」として言語化に成功。これらを元に、観点固定によって生まれるすべての悩みや煩悩を一掃するための認識技術を「観術」として体系化し、教育産業ベンチャーとして現NR JAPAN株式会社を設立。2011年、日韓VISION同盟を設立し、韓国代表に就任。2012年、次世代リーダーを育成する「観術スマート研修」を開催開始。2014年、韓国に株式会社NR KOREAを設立。日本にとどまらず世界へ活動の場を広げている。

著書:『認識革命』『感動革命(上・下)』『コミュニケーション革命』『学校革命』『国家革命』『観術で聖徳太子「十七条憲法」を生かす』『観術で生かす日本の和心』

内海昭徳 Akinori Utsumi

日韓 VISION 同盟

日本代表

観術総合研究所代表

NR AMERICA設立準備本部長

日韓 VISION 同盟日本代表

1978年東京生まれ。筑波大学国際総合学類卒業、京都大学大学院 人間・環境学研究科修士課程中退。9.11米国同時多発テロを機に世界支配構造と人間の根源的な意識変革に関心を深める。フリーターをしつつ次代の文明像を探究する中、観術創始者である盧在洙と出会い、観点の次元上昇から始まる日本発のパラダイム転換の活動に共に取り組む。21世紀教育ルネサンス、JAPAN MISSION PROJECTの代表として草の根の社会活動を全国展開し、2010年に福岡市長選に史上最年少立候補。2011年に発足した日韓VISION同盟の日本代表としてアジアから始まるネクスト・ルネサンスを掲げ、人本主義を土台とした尊厳社会へのプレートチェンジに向けて国内外を精力的に活動している。

著書:『新世界への航路』『みんなの夢がかなうハイパーコネクション都市 ~わくわく尊厳シティ~』共著者:大川知之

# 日韓ビジョン同盟特別企画「日韓関係をどのように解決するのか」

発行日 2015年11月21日

著 者 盧在洙

内海 昭徳

発行元 日韓VISION同盟 編集部

福岡本部:福岡県福岡市中央区天神5-7-5 ベスト北天神ビル5F

TEL:092-732-6933 FAX:092-474-7177

東京支部:東京都渋谷区桜丘町13-9 クリエート桜丘センチュリー21

TEL:03-3770-5399 FAX:03-3462-5134

URL: www.japan-korea.org

※本内容に関するお問い合わせは以下メールアドレスまでお寄せください。

Mail:fukuoka@japan-korea.org